

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」^{ほうそうげんこう}放送原稿（11月29日（金）放送分）

テーマ 新着図書紹介

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。^{かごしまけんりつあま}鹿児島県立奄美図書館です。

ただいま、奄美図書館は特別整理期間のため休館しております。この期間は、奄美図書館にある約20万冊の本を1冊ずつ点検する作業を行っております。皆様にはしばらくご迷惑をおかけします。今朝は、閉館が明ける12月6日から利用できる新着図書の中から5冊ご紹介いたします。

はじめに、一般書のご紹介です。

1冊目は、『なぜ富士山は世界遺産になったのか』という本です。今年の6月22日、富士山が世界遺産に登録されました。登録までの道のりがいかに厳しいものであったか、著者で、「富士山を世界遺産にする国民会議」の運営委員長、^{おだぜんこう}小田全宏さんがこの中で記しています。実は富士山は、1992年、世界自然遺産としての登録に手を挙げ、246万以上の署名を集めたにもかかわらず、エントリーされなかったという苦い過去を持っています。いったんあきらめかけた世界遺産登録でしたが、自然遺産としてではなく、文化遺産としての登録に向けて努力を重ねていきます。そして、ようやくその努力が認められるのです。なぜ日本一の山、富士山が自然遺産ではなく、文化遺産なのでしょう？不思議に思われる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この本を読めば、なるほどそういうことだったのか、と納得できると思います。

2冊目に紹介するのは、『風に立つライオン』です。シンガーソングライターのさだまさしさんが、同名の歌を1987年に発表しているため、このタイトルを聞いたことのある方もいらっしゃるでしょう。この歌を今回、さだまさしさんが小説として書き上げたものです。時は1980年代後半、^{へきち}アフリカでの僻地医療に青春をかける青年医師が主人公です。そして物語は、彼をとりまく医師仲間の^{じゅつかい}述懐、^{かいこ}回顧により展開していきます。この医師のモデルは存在するそうです。読み進めるうちに、彼の生き方に深く心を動かされていきます。それから長い月日を経て、2011年の東日本大震災まで、彼の^{こころざし}「志」というバトンが受け継がれていることが実感できる壮大なドラマです。

次は、児童書をご紹介します。

1冊目は、『ちいさいおうち うみへいく』という絵本です。アイルランドの作家、エリーシュ・ディロンの作品です。もしもあなたの住んでいるおうちが夜のうちに歩き出して、朝、目が覚めて窓の外を見たら、あなたの知らない土地に来ていた、なんてことが起

こったらどうでしょう？びっくりするほど愉快的なことだと思いませんか。でも、おうちに住んでいる家族が新しい土地になじめず、また元の場所に戻りたいと願っても、おうちがその場所をてこでも動いてくれなかったら、どんなに困ることでしょう。この絵本は、まるで人間のように意思を持つおうちと、そのおうちに住む家族の、ちょっぴりハラハラドキドキするような冒険物語です。

2冊目は、『いのちのギフト～犬たちと私から送る勇気のエール～』という本です。今年102歳になった日野原重明^{ひの はらげあき}さんの著書です。日野原さんはお医者さんとして有名ですが、NPO 法人「動物と人の愛の絆促進協議会^{きずなそくしんきよう ぎ かい}」の名誉会長という顔も持っています。この本の中で日野原さんは、「保護犬」と呼ばれる飼い主のいない犬や、介護施設やホスピスなどで人の心を癒す「セラピー・ドッグ^{い や}」を通して、いのちの尊^{とうと}さを訴えています。犬と人間の信頼関係を考えさせられる1冊です。

最後は郷土に関する本のご案内です。

中得一美^{なか え ひ と み}さんの小説『嫁の心得^{よめ こころ え}』です。著者の中得一美さんは、奄美大島出身の47歳で、現在、埼玉県にお住まいです。この小説の主人公「いの」は、農家から武家^{ぶ け}に嫁^{とつ}いできた六尺^{ろくしゃく}もある大女^{おおおんな}です。女としての幸せをつかみかけたのもつかのま、試練がおそいかかりますが、「いの」は果敢^{か かん}に立ち向かっていきます。「いの」の運命は……。この作品は、放送局や出版社が映画化したい作品を発掘する、第1回日本エンタメ小説大賞を受賞しました。

はじめに申し上げましたとおり、奄美図書館はただいま休館中です。12月6日、金曜日より開館いたします。ここでご紹介した本以外にも、たくさんの新着図書を準備して、皆様のお越しをお待ちいたしております。

以上、鹿児島県立奄美図書館^{かごしまけんりつあまみとしょかん}でした。